検疫と荷物検査

杉村楚人冠

青空文庫

午後三時十五分にゴールデンゲートを過ぎてから、今迄にもう何時間経つたと思ふぞ。

先づ検疫船が来て検疫医が乗り込む。一等船客一同大食堂に呼び集められて、事務長が変な所にアクセントをつけて船客の名を読み上げる。読み上げられた者は、一人々々検疫医の列んだ段階子の下を通つて上へ出て行く。『ミストル・アサヤーマ』。「ヤ」で調子を上げて少し引ツ張つて「マ」で下げる。成程山のやうに聞える。『ミストル・ヘーガ』。日本人の給仕が気を利せて『芳賀さん』と読み直す。『ミストル・ホーライ』。これは堀だ。『ミストル・アイカイ』。之は猪飼だ。『ミストル・キャツダ』。勝田君が出て行く。『彼奴だ〳〵』と、皆くす〳〵笑ふ。自分のことを笑つたのかと、左なきだに無愛想な顔をしたモンゴリア号の事務長は、益むづかしい顔をする。

検疫は五時に済んだ。今度は税関の小蒸気が著く。之にはクック社の桑港支社長ストークス君やら、朝日新聞社桑港特派員清瀬規矩雄君などが便乗して来たので、陸上の模様明日の見物の次第などを語り合つて、大方賑やかになつて来た。税関附の官吏が来て、大蔵省から桑港税関長へ宛てた書面の写を呉れる。見ると、一周会員の荷物は東京駐剳大使の照会があつたので、一々検査を加ふるに及ばぬとの内訓である。

其の中新聞記者が来る、出迎人が来る。汽船会社の雇人が来る。甲板は上中下ともぎツし り人で埋まつて了つた。陸の方を見ると、いつしか我が船は港目近に進んで、桑港の町々はつ

い鼻の先に見える。我等の泊るべきフエアモント・ホテルは高い丘の上に突ツ立つて居る。夫から下の方へかけて、カリフオルニヤ街の坂道を、断間なく鋼索鉄道の往来するのが見える。地震の時に焼けたのが彼処、近頃建てかけた市庁は彼と、甲板の上の評定とり〳〵〳〵頗る喧しい。

六時が七時になつても、船はひた〳〵と波止場の際まで押し寄せて居ながら、まだなか〳〵著けさうにない。其のうち又しても銅鑼が鳴る。孰れも渋々食堂に下りて、例に依つて旨くも何ともない晩餐の卓子に就く。食事がすんで又甲板に出ると、日は既にとツぷりと暮れて、やツとのことで船は桟橋に横づけになつたらしい。時計を見ると早や九時。ゴールデンゲートから此処迄に四時間かゝつた勘定になる。

桟橋に出て見ると、がらんとした大桟橋の上屋の下に、三つ四つ卓子を列べて、税関の役人が蝋燭の光で手荷物の検査をして居る。卓子の側が僅に少しばかり明るいだけで、其の外は電灯一つ点けず、真黒闇のまゝで何処を何方に行つて宜いかさツぱり分らぬ。此処でさん〳〵〳〵待たせられて、彼此三四十分暗黒の中に立つた後、漸く桟橋の外に出ることが出来た。持ち出したのは形ばかりの小さな手荷物で、大きなトランクは明朝取りに来いとのことだ。人を馬鹿にするにも程があると、皆ぶん〳〵する。

後で聞けば、何でも太平洋汽船会社と税関だか桟橋会社だかとの間に、前々からひどい確執があつて、之が為に船の著くのも遅くなれば、灯光一つない桟橋の中に人を立たせるにも

至つたのだといふ。喧嘩なら喧嘩でも宜いが、其の尻を縁もゆかりもない船客にもつて来るとはひどい。翌日の新聞には、此の闇の中に摸摸が何人とやら入り込んで、何々の品が盗まれたとのことを挙げて、盛に会社の不行届を攻撃したのがあつた。

玄関番の書生に不作法な取扱を受けると、其処の主人迄がいやになる。著米早々の此の始末は、少からず僕等に不快を与へた。（四月三日）

＊著者の遺志により総ルビのままとしました（編集部）

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆79　港」作品社
　　1989（平成元）年5月25日第1刷発行
底本の親本：「楚人冠全集第二巻　大英游記　半球周遊」日本評論社
　　1937年（昭和12）年3月1日発行
入力：浦山敦子
校正：noriko saito
2018年6月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

検疫と荷物検査

杉村楚人冠

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/